

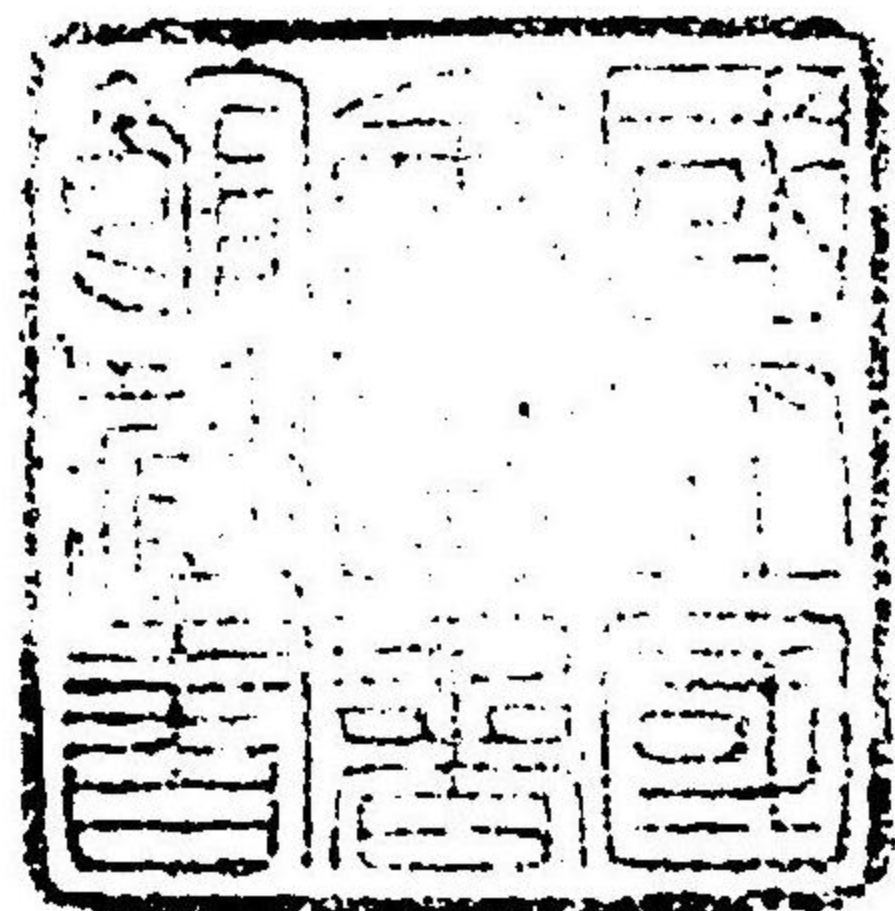
奥羽觀蹟聞老志

十四

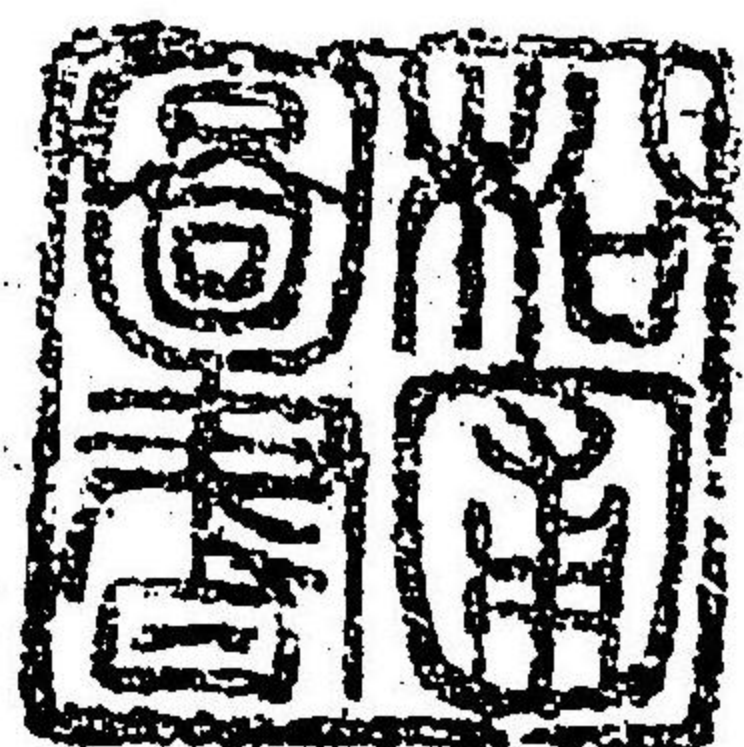
291.2

Sa53/o





348443



奥羽觀蹟聞老志卷之十一下

安積郡

仙臺 佐久間義和著

延喜式續日本紀及和名集作安積萬葉集  
作安積香或作朝香新古今序並和歌本紀  
作淺香今從續日本紀

四十四代元正帝養老二年五月己未割安積等  
五郡置石背國

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奧  
國安積郡人外從七位下文部直繼足賜姓阿部



安積臣

四十九代光仁帝寶龜三年六月丙申陸奧國安積郡人文部繼守等十三人賜姓阿部安積臣  
五十代桓武帝延曆十年九月癸亥陸奧國安積郡大領外正八位上阿部安積臣繼守賜外從五位下以進軍糧也

五十四代仁明帝承和十年十一月庚子陸奧國安積郡百姓外少初位下狛造子押麻呂戶一烟改姓爲陸奧安達連

神名帳曰安積郡三座大一座 小二座 宇奈己呂和氣

神社名神大 飯豐和氣神社 隱津島神社  
五十六代清和帝貞觀十一年三月庚午授陸奧國從五位上宇奈己呂別神正五位下  
同十二年十二月丙戌陸奧國安積郡人矢田部今繼大部清吉等十七人賜姓阿部陸奧臣  
安積山

日和田以北有高山其山形如一圓丘嶺上有一樹青松臨山頭則近鄉入于吟眸是乃安積山也  
八雲御抄第五安積山尾張或は伊勢國又未此住以俊賴は阿さまはといへるに病なるとゆ



へよこりて何ぞやまといふへ志を俊成は  
不可然と也影さへといゆる山の井は此何さ  
山也にこりていふへあり

夫木集山部安積山陸奥

有由緒雜歌緒一作緣

万葉十六

安積香山影副所見山井之淺心乎吾念莫國

右歌傳云葛城王遣于陸奥國之時八雲御抄

字作國司字司祇承緩怠異甚於時王意不悅

則意尤備焉怒色顯面雖設飲饌不肯宴樂於是前有采女

風流娘子左手捧觴右手持水擊之王膝而詠  
其歌爾乃王意解脫樂飲終日

甚矣好色之能移人歌詠之能起人也諸兄  
奉敕而遠游焉可謂嘉賓上客之可敬者也  
不可不馳驅奔走然國司及緩怠上以輕王  
命下以謾縉紳其犯上之罪惡不可免焉諸  
兄之暴怒宜哉於是始覺其不恭而出一女  
子以解憤恚于一觴一詠之間以謝罪可謂  
克成得其術矣其事雖似元出乎祝變然非  
徒以尤態諛容而取其媚悅其旨趣出于情



欲難止者而以優游涵詠述其志是亦不幾樂而不淫者乎於是諸兄亦至憤怒忽消融無些子之凝滯乎肚裏者所以實為和歌之德也故得其性情之正者男女自然之本心也是以後世貴難波津之詠及此歌而擬歌學之父母其志意之所寓宜乎哉

詠歌本紀曰日本武皇子伏日高見國至忍生國時國首等奉饗而為事疎大王不喜已欲物餘采女春姬知無為而好乃進取奉觴奉上文酒調曲謠之大王解情致平均

采女春姬

淺香山影牘見若焉山之井之淺磨者人乎惟生物歟只

按古來以此歌為橘諸兄東行時采女之所詠焉於古今序亦愈自是以來和歌者流及天下後世公然解其事實母其和歌也然今載之本紀而以日本武尊而易葛城王以采女春姬而為奉觴女其事實其詠歌則同而其人其名則異於是乎蒙濳惑焉耳  
市原王歌一首



万葉八

待時而落鐘禮能雨令零取朝香山之將黃變

按右歌載新拾遺秋部令零取作雨濺爲讀  
人不知

貫之か古今集序に淺香山のおとの葉は采  
女の戯よりよえりうつゑきのおほきとを  
陸奥へ川うはととりなるとき國のつかさ  
をもれろそひなりとてまうとあとしとり  
とまとすさまじりなりはうねえかりと  
る女のうはゑととりてよめもありおれに

おほきみのこゝろ解にけり

淺香山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を  
れもよもれりは

色葉集二十八

あさか山かけさへみゆる山此井のあさ  
くは人をれもよもれりは

葛城比王のみちの國へくとり賜ふに或國  
乃祇承の司のまうけおろせりありとて王  
心よらは是によりて采女王乃御ひさを  
とくたて此歌を字たふに王の御心とけて



快ありぬとゆけりさは此は古今假名序あさ  
 の山の詞は采女の戯よりよ見出てと有是  
 を大和物語には井下大納言の娘とすと終  
 りあるものぬすみて安積此郡所さり山に  
 おもりにて家をつくりすへて里にいて、物  
 と求めてくは抄ありくに出て二三日こさり  
 されは待託て出て山の井に影を見ればあ  
 りむかたちにもあらぬとく、れそろこ  
 とありたりさて此歌を木よりたれりて池  
 よりいりて死にたりをとこ歸りていとあさ

まじやれもふし山に井なりなる歌をみて  
 れもむお死にけり世のふる事よあむ有け  
 るとは物語のむか事あるへし  
 世を乃ゆれて後修行のつるてああさり山  
 をこえて侍けるに昔の事思ひいて侍てよ  
 み侍ける

蓮生法師

古への我とはいふとあさるやま見え山井  
 乃影にあらぬは

按蓮生乃宮都宮彌三郎迷世而爲浮圖其



於仕官高車駟馬之榮旗旄導前騎卒擁後  
夾道之人相與駢肩累迹瞻望嗟其榮達  
者亦抑幾許哉今取路于往日之江山也顧  
己則顔色憔悴形容枯槁其所著者草鞋竹  
杖孑立孤行實所以不勝人情者也於是乎  
興無窮之感慄生若干之舊懷焉彼之入浮  
屠雖未詳其由至時世之變化人間之盛衰  
則盡寓諸一篇之詠焉故俾人讀之則復發  
無限之哀情矣可不悲痛哉

續古今雜下

前内大臣

八雲立道とふり死せあさり山あさくも人の  
れもひとりるかか

續千載戀二

爲氏

影をよよいかてか見まじ契こそうぬてあさ  
りの山の井乃水  
人ぬ賜をせける

續後拾遺戀一

光孝天皇御製

澁るやま朝ある雲の風をいよみぬゆたふこ  
ころわたはもたらと

古今序の詞めてよぬ侍なる歌の中に



新千載雜中

僧正榮海

しき島のみち乃おくあるあさり山ふりき心  
といかてしあまこ

淺香山

六帖

あさり山如いみの谷あけこもりわの物た  
もむとるゝまもなこ

歌枕曰今按云霞谷所名歟可詳

夫木春

曾根好忠

淺ましや安積此山のさくふとあすみ籠て

ゆみはすもあるりな

結縁經百首

同

少將内侍

何さの山あさりあかぬも山は井の影見る水  
よゆく何さるりあ

仁安三年歌合

同

常陸丸

いりあれは何さの山はあやにくに紅ふり  
くもみちあはれは

安積里



堀河百首

師頼卿

小夜中よ思へはくるをみち乃くのあさりの里に旅ねしてけり

歌枕曰此歌金葉沼云云堀河百首一本里云云仍里載之

安積沼

在日和田西去安積山西亦二里餘其池塘廣二町餘如今不生菰蒲却生蓮者多

宗久紀行に白河より出羽の國へこえてあまや比松あと見ぬをり川、あまの國あさ

りの沼をすく中將實方朝臣下られたるに此國は何やめ乃かりときは本文の水草とふくとあれはいづれもおあしことなりせてかみみにふきりへけると申付たへ侍る寛治七年郁芳門院の根合は藤原の孝兼か歌はあやめをさ引手もさゆをあか根れいうてあさり乃沼に生げんとよ免るは此國もあるはやと年月ふとんにお不白しりは此はひ人は尋志の當國にあや免のあきにあらはされともり此中將の君



くたり給ひし時何乃あやめもえらぬ志の  
軒端よはいりく都にたかあや先ぞと  
よくへきとくわのあそふかせぬれるよ  
りあれをよき傳へたるとかたり侍し如は  
けにもさる事も侍るにやせくるしけ侍  
りぬ

萬葉四中臣女贈家持歌作花勝見

娘子部四咲澤二生流花勝見都毛不知戀裝  
摺可聞

八雲御抄三薦の註にみち此國に花うつみ

といふよ、四つみをもをみかへえさを澤  
よ生入る花の川をいへり是は中臣女に  
家持の遺す歌非陸奥如何可尋蘆根とひか  
川みよとけきと同志事也

藻鹽草第二時節部五月五日奥州に菖蒲と  
はふりよあもをよくとあり是をわ川みふ  
けといふあり昔はあち乃國にやえ乃あ  
りり志故也陸奥國安積乃沼あり

又四つみ薦奥州にわくいふ也と云云又は  
か川之草共いよなり花か川をうつ見あ



さかの沼にりきるへきと云説有不可用之  
いつをにもあめり  
無名抄下五日うつみをふを事ある人云橋  
爲仲陸奥國の守にくくたりとる時五月五  
日家ことにこもをふきとればあやとく  
是ととふその時莊官云此國は昔より今  
日菖蒲ふを事といふ事とあはれとる  
故中將此みとちの御時けふはあやめとく  
ものをたはねてふと侍りけれと此國あ  
はあやうふなれよと申侍けり其時さ

は安積の沼の花かみといふ物あはそ  
れをふけと侍よりとくふれそめて侍あ  
りとそいむける中將のとちといふは實  
方の朝臣也

故事談曰彼國依無菖蒲五月五日水草と同  
事とてうつみを被葺たり其後國習にて今  
如斯

新撰陰陽書云五月可葺水草云云  
袖中抄第四のつみ

陸奥の安積の沼の花うつとつみ人



の戀し死やなそ

能因り歌枕云うは凡とはおもといふこも  
花をはなりはみといふ無名抄云うつゝと  
いへるはこもを云也りやうの物も所の名  
も所にたさかひてゐはれるか伊勢にあふ  
をは濱萩といへる如ことくに陸奥よこも  
をのけみといへるあめり五月五日おも人  
乃家にあやめとはふ如て四つとふきとて  
おもとそふくなり彼國よはむら志菖蒲の  
あかりとるとそうけとまはり志此頃は何

さかの沼ああやめをよえとむること  
も申志はへし私云故六條左京兆此申さ  
き志は橘爲仲如任肥後守盛房の下向志  
歌枕共の事申とける陸奥おも菖蒲あふ五  
月五日にはかみふさとてくもをあむふ  
くといひける也而郁芳門院の根合よ孝善  
あよめる

あや先草むくてもさゆを長き根のいり  
てあさこの沼ふ生けん

此歌無別難して持にありぬ又俊頼入金葉



畢如何とこそは侍志か江記には右方の人々淺鹿沼間在陸奥自京一月之路也不可逢今日事所引之菖蒲定黄損歟云云此難ははへりれれとも判者は左歌はあさか沼よよせて根をは引く手もたゆくあか志と讀さる事よりむさる心地すれ共すかゝ歌えられたれは持と申と云云判者右方人雖加他難陸奥菖蒲と云難は不出來歟童蒙抄云何の國の風俗にてか川矣とはおもをいふなりむらゝあやえなかりげれは五月五日に

は四川みふきとてこもをよく也橋爲仲任よあもよみきよきは腹たちくみをおなひくふのせなる在麿れものせめ志出志く見れは年老頭白れ者よてありい四て年のよりて四ゝるおとはせさするそといま志めれれも中將の御館れ御時蒲菖やさよらはさりらん安積の沼の四川又とそよをきよ志さふくひけきは其後かを例にありて川かまほる也といひけれは爲仲耻く引入おけりせおあり川たへさりさは實



方此中將の時より心をあさへ志私云彼國  
よりのことふきと云事あかりけは信夫郡  
に今年のこもをりて御館ふり屋をけ  
をりてふはは志む其後にこもかるとかや  
五月五日の事よはあはすそきと菖蒲を控  
ふきはへるあり是は宮内卿師綱朝臣は説  
也陸奥司にて下向せる人なり慥事歟可信  
之此のほとふきをあはれさまおとりな  
て盛房の語けるは但の中將はあちのく  
乃所々歌枕見む爲ふ中將ふへて任也仍

云陸奥中將さる心なれば菖蒲をかはあさ  
のぬまはれつみをふたと申さきとん  
任國の所いた金吾將軍の合戦出來て國中  
散々水驛云々又彼國にて逝去畢旁以遺恨  
然而數寄の名をとむるやさな事也又  
萬葉にはおもとよえる歌ねふた川あ  
よめる歌をそくあ

をみなへとさくさそふ生ふる花り川み  
都もとぬ戀もそ哉

綺語抄云はありほみととあ志の花をいふ



又おももの花といふともいへり散木集云は  
なり川女といへることをある人れよみと  
りなるをいふといふとそとに川ねけは  
はようもあらぬおををとり可はにいふと  
さこはれは心れ内におもひなる  
鳴のるる玉江に生ふるそあ可川み可川  
よああからしらぬ也けり  
といふあはれはなといふことそれかす  
古今懸四  
よ見人しらに  
見ちのくの安積れ沼の花かつと如はみる人

に戀やわらむ

色葉集花か川みとそこの花也おもをそ  
か川みといふ也

宮内卿經長かかほの山莊にてさみたれ  
をよみ侍ける

後拾遺夏

藤原範永

五月雨ふ見えととよ乃原もなとあさかの  
沼の心地のみして

郁芳門院根合にあやめをよめる

金葉夏

藤原孝善



あやめ草むく手もさめく長き根のいりてあ  
さりの沼に生けむ

故事談第二郁芳門院根合之時右方有五丈  
之根云云件乃根備前國爭古斗の狭戸にあ  
る似菖蒲物比根云云凡菖蒲根長不過丈也  
前例最長根は杜若あり云云  
百首歌の中に旅宿のおゝるをよめる

同雜上

參議師賴

と夜中にたもへは悲志見ちれまの何さのの  
沼に旅ねしてけり

夫木集堀河院御時百首又此歌家集云みち  
のくの安積の沼の邊に京より人來てとま  
せりと有作者大納言師賴を有  
右歌載前篇里下據金葉沼說重收于此  
最勝四天王院比障子にあさり乃沼書たる  
所

新古今夏

雅經

野邊はひまた淺香の沼に刈草のり刈あるま  
まにしる頃哉

關白左大臣家百首に見戀



續古今戀一

今上御歌

契とはあさかの沼とれもへはや如けとあか  
ぬも袖乃ぬるらん

同

同

定家

字志はらあさり乃ぬまの草比名にりり  
もふかき江に結とて

百首歌奉りける時沼螢

續千載夏

爲氏

刈てほそあさかれば沼の草比るへにかつとあ

るゝはゆたるありけり

題くらき

同戀三

權中納言公雄

花四つあつて見ても猶とれま純す安積の沼  
比澄死こゝろは

續後拾遺戀三

源信明朝臣

花の川みろ川見る人のこゝろさへあさりの  
ぬまになるそ悲しき

戀歌乃中に

新續古今戀五

賀茂遠久



契のみ百さる乃沼れあやめ草ふりきうらみ  
に音社あゆる純

名所百首

順徳院御製

人あゝろあさかの沼のうすこゆりかつまな  
うゑにたゆやはてなん

同

定家朝臣

いかにせむあさる乃沼は生ふときく草葉ふ  
川げく落る涙と

同

家隆朝臣

根をふりど我こぢれもへ人こゝろあさかの

あまの春の若草

建保三年名所御障子和歌

定家

ふえとたくあさか乃沼の夏草よりつゑと純  
飛とのよもますり

俊頼朝臣

あやめ草安積の沼に風吹はをちの里人ぢく  
かぶるあり

良玉

能因法師

君ら爲を川とと駒をまちのくの淺香の沼に



あれて見えしを

家集

俊頼朝臣

春駒をりささり乃沼あさりしてか川みれと  
と葉ふみしとくあり

六帖

常陸なる安積乃沼の玉藻こ抱ひりは絶すな  
我は絶せむ

歌枕云右詠<sub>ニ</sub>安積沼<sub>ヲ</sub>于常州<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>怪<sub>ム</sub>

村上の御時國々の名高れ所々を御屏風の  
繪に<sub>ハ</sub>い<sub>ハ</sub>せ給ひて<sub>ハ</sub>あ<sub>ハ</sub>さ<sub>ハ</sub>か<sub>ハ</sub>の<sub>ハ</sub>沼<sub>ノ</sub>關



家集前出詞を以て重出

信明

はなり川舟のほみる人のこゝろさへ何さり  
乃沼にあるを託志き

御屏風あさかのぬまさきま

家集

忠見

月やとる何さかの沼の水清みよるも袂のな  
ひくをぢめる

大入道殿御賀の御屏風歌  
あかさかのぬま  
あかさかの島す  
あかの松山

家集

兼盛



沼水も氷にけり志來しるぬ乃山路も今は絶  
やとぬらん

みち乃くに此所さうのほとりよ京よりを  
とまざる人さちとまれり夫木集には東宮女  
御賀御屏風歌と有

同

元真

音おたぐあさ四の沼に朝不ぬたぬぬとふ  
りは名のみなりなり

最勝四天王院名所御障子

夫木集

後鳥羽院御製

篠わととあさか乃沼に花のほえりつ見る夢



乃あくる程あき

建保三年名所百首あさかの沼陸奥

同

兵衛内侍

はなわのあさかの沼たゆる鳩鳥のあさかの沼  
に水馴そめけん

貞應二年當座百首名所菖蒲

同

民部卿爲家卿

菖蒲刈あさの比ねまにまじりてもくけみあ  
しるは夏虫のうら

同風

信實朝臣



花うけのまかほみたれゆく浪風お露や何さりの名に通ふらん

題名

同秋

よみ人

草枕夢は絶ぬるまぢれくの何さりの沼比鳴

比はり

小大君

家集

くるとれお何もとむらんあやめ草朝香の沼に生ふとあぢれ

堀河百首

紀伊



五月雨に際あき頃は水まさりあさりの沼の  
名にやさうはむ

後堀河百首

大進

いひせむあさかの沼乃澄まじやうみとる  
人よあらぬこゝろと

建保百首下同

定衡

澄りらぬあさかの沼の花うみりみり色  
を出にけるかな

俊成卿文

契おほあさりのぬまの花かほみかみなる色



に露そこほるゝ

忠定

川をぬれをも憂をもしらぬ心りああさかの沼  
のうつあかうゑに

知一家

心さじさこそ安積の沼に生ふる川みる不  
とはわすれ知るゝ

範宗

人心あさうれ沼のうつともありぬやふら  
れころなるらん

行宗

いりにせむあさうれ沼のうつみてぬるゝ  
は袖れあらひ成なり

拾玉

慈鎮

尋來をあさりの沼のうき川はた色はりあ  
そふかを見ゆとき

安積山それ山井よ忘き水あさくもそとどぬ  
らすころいな

あやえとると川乃管笠なふすめり安積の沼  
の雨の夕暮



淺香山井 歌枕作安積井 近江有同名

去安積山、西一里餘、今市村、中有小池、爲廢井、久後人恐失、陳迹也、以竹籬圍之、纔存其地、鄉人曰之山井。

藻鹽草山井、所山の井とれ、字有ても又山井は所と事ふいへり、と此はあさくは人々たもふあといへる、又結手乃隼まよこる山の井乃をいへり、又あさくの岩井、奥州

大和物語に昔大納言のみむすめいとを字うつくこくてもよまへり、るをみよとよ奉

らんをのこは給ひるに殿にほかうま川りはる字とねりにて有ける人いかてか見ん此娘を見てはり顔かさちいと字川をいとあはうらあるをみてよろ川はあともたは白す心あかくりて夜るむるわひとをのみ覺えて病あありふけ此は夢さあきりすへたことなんあるといひければあやと何事そといひて出たりけるをさるこゝろまうけとてゆをりもなをのたきたきくぬきみく馬ふれせく陸奥國へよるともいはすむるをよあくらにけ



てゐにたりあさかの郡安積山といふ所に  
 回りを作りて此をんなをへて里あいて  
 物あんともどめてをば務つゝ年月をへま  
 り此をとこぬはとゝむとり物ゆくはて  
 山乃中よるたはかきりかくわひをかり  
 りうゝるほとまはふあなり此をとこ物  
 と先よいてゝるあなるまゝに四五日こさり  
 けり待詔て立いてゝ山の井お影を字に  
 純はありとかゝるまにもあふす何やとさ  
 にありまけり鏡もなり純は顔のありとらん

やうもとらてありなるふ俄に足れはいとお  
 ぢろとらなるをいをはつりととおむける  
 さてよあさりける

澹香山影さへみゆる山の井のあさを人は人  
 をおもふ物かは

とよあて木よ書はけていりあかへりてし  
 にゝなりとこもれあんともどめゝ歸れは  
 志にゝみせりけれはいとあさましを思む  
 けり山の井なりなる歌を見てゝへり來ゝ是  
 とおもひをふゝたはらふふせりゝ志に



けりよれふるこそよかんありける  
 橘成季古今著聞集に昔大納言かりける人の  
 御門にさくま川をんせてあつぎける女を  
 うとねりあるも乃姫すまてみちの國にいよ  
 たりあさり此郡あさり山に庵結て侍ける程  
 おをとあ外へ行さりなる間に立出て山に井  
 お容とろほえて見るにありとよもあさす成  
 よなる影とはちと歌と書つけてみつあはは  
 いかく成あけるを大和物語に記せり  
 按右歌與采女之所唱歌其詞同而其實大

異也所舉之亞相亦不知何人且不詳何代焉  
 古今叙言淺香山之詞出於采女之戲言然則  
 往昔有此故事而後采女謠所傳世之古調乎  
 公子前者歟想若和歌本紀說至采女春姬爲  
 日本武尊前奉觴者又可怪可驚  
 古今戀五  
 よみ人しらぬ  
 山乃井乃淺死心もおもはぬをかたさりの  
 と人の見ゆらん  
 あひ侍ける人の久しう消そこなありけれ  
 はつかわあなる



後撰戀一

紀の光のと

影たにもみえに成に山乃井を澁きよりま  
と水や絶に志

返し

同

平 貞文

澁志てふこそをゆと志み山の井はやりえに  
こりに影を見ゆぬ

山の井の君お川やは志げ

同 雜二

讀人志らす

音に乃みきとてはやま志あさまともいさく

み見てん山の井の水

戀のこころをよめる

金葉戀下

右兵衛督伊通

山の井の岩もる水に影み純は澁ま志げあも  
成よけるか

よをのかれて修行のつるてにあさり山を  
こえ侍けるにむらこのこそとれもひ出侍  
てよみはへりける

新勅撰旅

蓮生法師

いにしへの我とはしら志あさか山みえと山



井の影にふあら糸を

同戀一

待賢門院堀河

袖ぬるゝ山井乃清水いりてりは人めもらさ  
てかけを見るへた

戀の歌の中あ

續後撰戀五

興風

澁りぬむ事とたよおそ思むとる絶やは川へ  
き山乃井の水

續後拾遺釋教

信實朝臣

山此井ふあ四す影みる外にまゝあま統る水

をくみそにこさと

弘安元年百首歌奉りし時

新後撰戀四

院大納言典侍

をやとをそ結初けるそのまくにさて山の井  
の澁き契りを

戀乃歌とて

玉葉戀一

藤原宗緒朝臣母

影はりり見とをりこそれ契にて結はぬ中の  
山の井の水

百首歌奉りし時



續千載夏

藤原大納言爲世

山は井もまさるみかたにふあふるら影さへ  
見ゆぬさまたれの頃

戀れ歌の中に

同

待賢門院堀河

山の井の澄き心をしりぬれは影みんこそは  
れもむたえよき

同戀一

前大納言爲氏

影とあふいりてふあまに契あそつとてあさ  
かの山は井の木

題とあは

同戀四

源邦長朝臣

山は井乃澄けなうらもるのみとは影見とま  
ての契り成けり  
戀の歌れ中あ

同

平貞熈

契りしも叔山乃井の忘れ水忘れ後と見る  
影もあし

新千載戀三

壽成門院

あのみへき方こそなれは山は井の底の心を



をみてゑるあゆ

新拾遺戀二

冷泉前太政大臣

せきとむる山井の水の影にふ見れば袂を  
あはらまゑやは

續古今戀二

平 親隆

見るうぐに人の心そくまねぬる岩井とた先  
志山の井乃水

同四

芬陀利花院前關白

ふろくぐぬ契か如衣の影にふあと山乃井  
は見えず成らむ

三百六十首陸奥岩井

夫木集

曾根好忠

水草生を淺香の岩井夏くきはあまてるうら  
のす泥かてにす

百首御歌

慈 鎮

結ふ手にきえぬ思むや山に井乃流れにいた  
く螢あつらん

家集

前中納言定家

手馴はすむ岩井のあや先くさゆは枕  
よまゝや結はん



信明

そほつともこゝにくさむ山の井の戀しき  
人けりけやみゆると

源氏若紫部に御文にもいとねんころよ  
い給てぬの御はあちの死あんかは見給へ  
まほしきとて例の中なるには

源氏

あさり山あさくも人せれもはぬにあと山乃  
井のゝとはあるらん

御返し

右

くみおえてくやと死くし山の井のゝさき  
あかぬや影をえりへ死

磐瀬郡

先代舊事本記石背國造志賀高穴穗朝御世二十  
行代景故連許侶命功建彌依米命定賜國造

四十四代元正帝養老二年正月乙未割白河石  
背會津安積信夫五郡置石背國

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳磐瀬  
郡人外正六位上吉禰侯部人上賜姓磐瀬朝臣



大國造道島、島足之所請也。

神名帳磐瀨郡一座小 梓衝神社

五十六代清和帝貞觀五年十二月甲戌陸奥國磐瀨郡人正六位上勳等吉彌侯部豐島賜姓陸奥磐瀨臣其先天津彦根命之後也

同六年六月己亥陸奥國岩瀨郡權大領外正六位上磐瀨朝臣長宗借叙外從五位下  
同七年十一月己卯陸奥國磐瀨郡大領外從五位下磐瀨朝臣富主授外從五位上

磐瀨社

在須賀川驛口右邊山上建鎌足神社

よ其人志るに

とちれくのあさり此事を人とは、いかに  
わせの森はくさえむ

會津郡

舊事本紀曰二十三代清寧天皇五年天皇詔以物部木蓮子連遣東海陸奥諸國分大國出州分大郡出縣自陸奥出津輕會津篠生出羽定撩國造規髯縣主別紛宮田首田分別弗慥屯倉至此御代國事分明



四十四代元正帝養老二年五月乙未割會津等郡置石背國

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奧國會津郡人外正八位下文部庭融等二人賜姓阿倍會津臣

五十代桓武帝延曆八年六月甲戌入間廣成池田真牧安倍黑繩討賊時別將會津壯麻呂已下戰死

神名帳曰會津郡二座大一座伊佐須美神社  
大名神 蠶賣國神社

### 會津山

在猪苗代湖東蒼嶺巨南北而白雲遶山腰積翠聳青空是所謂磐梯山也嶺上見焦烟湛湖水碧鱗疊紋山下有毒石觸之者乃死土人曰之殺人石蓋殺生石之屬乎

友則のむすめ乃みちの國へまゝりけるに  
つかはこなる

後撰別

藤原滋幹女

君とのあまのふのさとへゆくものを會津の  
山にさるけたりなむ



千五百番

法橋顯昭

何冬と四々鹿に阿い津の山を統はいるに如  
むあるたつとありたり

題不知會津山陸奥

夫木集

よみ人志良氏

とどりえてゆりまじものをあい津山入より  
まとい道をとより誘は

堀河院百首

仲實朝臣

會津山す控野の原にともとすほく志にむ  
を控りけり志つる

色葉集十一とも志をは照射とかけり五月  
闇のめさすともしらぬ夜野山に火を燃て  
やあくるより二三尺計長き串に火を燃て  
やあくるさごとくじて鹿の目をあはするを  
糸糸ひてゐるをいふありなくとは其火  
とともすく志くとひち井さだかとり此名  
也

藻鹽草會津裙野 奥州志の志の里

會津嶺

前所謂磐梯山是也特出諸山峻極高大故稱會



津嶺

藻鹽草わぎしう あい津ねのくにねさを云

陸奥國歌

万葉十四

安比豆爾能久爾乎佐杼抱美安波奈波婆斯努  
比爾勢牟等比毛牟須婆左爾

會津里

夫木集

藤原宗國

りひかじや尋來た此とみちのく乃會津のさ  
とも名のみ成けり

會津關

藻鹽草奥州 夫本集會津の關國不分明

會津乃關

夫木

俊賴朝臣

るるあとお會津乃關も我といへはあたくあ  
こてもぬるゝおてりか

會津川

藻鹽草會津川奥州 異説出羽

六帖

心にもあがてわさり志會津川憂名を水にう



つゑつるのな

猪苗代湖水

近于若松篠山、地在磐梯山下、尤大湖也

鹽井

若松米澤、境有大山、土人稱六十里踰、殊俊嶺也。山頂生鹽、出于樹根、左右但出于右者多、涌于左者少、出者取之不盡、汲而無竭、於中華亦四川雲南鹽井之類似、羅褒以鹽井富者也。

諏訪神社

在若松城中、為鎮守祀健御名方命、乃大己貴命。

子與信州諏訪同

社畔有神石、高六尺、廣可三尺、以竹籬圍之、有人問之、則石對曰、唯呵祭之以醴酒。

羽黑神社

勸請出羽、羽黑所祀、乃稻倉魂也。

養蠶社

在城下、市店每歲蠶事既畢、分繭稱絲、效功以獻神、喜式所謂蠶賣國神社是也。

白河郡

前代舊事本紀第十白河國造志賀高穴穗朝御



世天降天田都彥命十一月世鹽伊乃己自直定賜國造

同代五十有三年秋八月丁卯朔天皇欲巡狩日本武尊所平諸國冬十月從海路已而幸常陸尙到白河關 此時世已有關門備可見

四十四代元正帝養老二年五月乙未割常陸國之石城標葉行方宇太直理菊多六郡置石城國割白河石背會津安積信夫五郡置石背國 四十五代聖武帝神龜五年四月丁丑陸奧國請新置白河軍團又改丹取軍團爲玉作團並許之

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奧國白河郡人外正七位上文部子老賜姓阿部陸奧臣同郡人外正七位下韞繼人賜韞大伴連 五十四代仁明帝承和三年正月乙丑詔奉充陸奧國白河郡從五位下勳十等八溝黃金神封戶二烟以應國司之禱探得砂金其數倍常能助遣唐之資也

同十年十一月庚子陸奧國白河郡百姓外從八位上勳等拍造智成戶一烟改姓爲陸奧白河連 同帝嘉祥元年五月辛未陸奧國白河郡大領外



正七位上賜姓阿部陸奧臣

神名帳曰白河郡七座大一座 小六座 都都古和氣神

社名神大 伊波止利和氣神社 白河神社

八溝嶺神社 飯豐比賣神社 永倉神社

石都都古和氣神社

五十五代文德帝齊衡二年二月癸丑以陸奧國

永倉神列於官社

關山明神

乃都都古和氣神社是也往時關山去今新宮東  
可三里松杉鬱鬱峙于白河城外驛口

今社地在白坂奧野之疆建兩社以爲關山神焉  
有二寺右曰和光山豐神寺陸奧地也左曰寶壽  
山正願寺下野地也右額黃藥徒高泉所書也  
神社啓蒙曰白川都都古和氣神社在陸奧白河  
郡一宮紀曰大己貴命男味耜託彥根命也  
十二代景行帝巡狩到此關門事見前篇  
四十九代光仁帝寶龜十一年十二月丁巳陸奧  
鎮守將軍從五位上百濟王俊哲言己等爲賊被  
圍兵疲矢盡而祈桃生白河等神一十一社乃得  
濟圍自非神力何存軍士請預幣社許之



五十四代仁明帝承和八年三月癸巳奉授陸奥國勳十等都都古和氣神從五位下餘如故

白河關

如今詳關山之地理關門之左右則高山也道路之通行則狹隘之地也雖未能極山谿之險至于控阨險要束制咽喉之設則足以爲保障與羽之國也縱令受大軍于茲支之關下之坂口張堅陣于前後進精兵于左右則豈容易得犯其險隘敗其利兵乎不知往昔何人逞防禦之術而關關門于斯地以固關東之變乎可謂精于兵法熟于地

利之人也和歌皆咏古關門者也

みち此國のしら河の關と侍けるあ

拾遺秋

平兼盛

便あらそい如てとやあへつけやあんとふと  
しら河の關はこえぬる

白河院あて花を見くよみ侍る

後拾遺春上

民部卿長宗

東路北人にをばしやしら川の關にもりをや  
花はよほふと

さきはなれ則光みちの國にくさり侍る



よいひ川かはさける

同別

中納言定頼

りり控先の別をおもへと白河比せきをいめ  
ぬはあまのありたり

みちの國あまかりくたりけるに白河關あ  
くよあ侍ける

能因法師

えやことは霞と共ふ出志ると秋風そふをこ  
ら河のせり

著聞集能因都あ在なりら此歌を出さんこ

と念なまとおもむく人にもえられす久し  
を籠居て色をろく日あありなとて後  
とちれ國のかたへ修行乃つるくよあま  
りと披露し侍りたる

白河院鳥羽殿あはしける時々のあとも  
歌合し侍りたるよ  
卯花とよめる

千載夏

藤原季通

見く過る人えかけ純は卯花れさるるりね  
やしあはのせき



嘉應二年法住寺殿乃殿上歌合に關路紅葉  
をいへる心をよ忍侍らる

同秋下

左大辨親宗

紅葉はのちあくるなるは散ぬれは名のみな  
りたりと白河の關

源三位頼政

都にはまゝ青葉にくみかとも紅葉ちりし  
く白河比せき

無名抄云頼政歌俊惠撰事下建春門院の殿  
上の歌合に關路落葉といふ題は頼政卿ら

をよま統て侍りてを其度此題の歌あま  
よみて當日迄れもひ煩く俊惠をよひて見  
せぬまけきは此歌そりの能因か秋風そふ  
く白河の關を云歌に似て侍りて統とこれ  
は出はへそへた歌也如の歌ならねとら  
もとりあててんとへとけよよめるとこそ  
見ゆと統にさりてとて難とすへきさまには  
あふすとはらぬひはれはいま車とあよせ  
て乗られらる時貴房ははからむを信じて  
さらは是と出すへきにお後後の科をはは



如し申へし望みひりけて出されにけり今  
度此歌おもひのこ望く出はへ志く勝より  
此は歸りくすなはち悦いひつ如はとより  
けると控見所有て爾り申したりとらと勝  
負聞さりと程とあふかくよそにてむねつ  
ふれ侍り志よみと死高名とたりとあん  
こゝろはりりは覺侍りいとそ俊惠りより  
侍りと  
羈中歳暮といへるこゝろとよめる

同族

僧都即性

東路も年もす志よや成ゆらん雪降にけりと  
ら河の關

續古今秋

寂蓮法師

逢坂とこゆふとくぬ秋風未と控れも  
とらりはの關

同

藤原秀茂

都出て日數は冬に成りよけり志く此て寒き  
白河の關

同

從三位行能

たあし冬を越てや見まし志く河乃關の河か



たれ鹽釜れうら

東北方にまかりとるにおもむの外に日數

川もりて秋まもなりにはれとよ光る

續拾遺旅

津守國助

とら河の關までゆかぬ東路も日數へぬれは

秋風そふく

同

觀意法師

夕暮は衣手寒れ秋風おひとりやこらむとら

河乃關

あちのくまゝまかりてよみ侍りとる

新後撰旅

藤原賴範女

音あこそ吹を聞に秋風のそてにあらぬる

白河れせれ

玉葉旅

法師住辨

あは來ても猶未遠と東路れおくとはいはと

あらわはの關

續千載秋上

皇太后宮太夫俊成

月を見て千里乃外をれもふあもこゝろを通

ふとら河のせれ

同旅

源 邦長



秋風はれもみよさより吹捲えて都戀忘れ  
らかはのせき

關雪と

續後拾遺冬

大江貞重

別あふみよこの秋乃日數さへ川も流はゆれ  
れあらのは乃せれ  
をみころも

同物名

津守國助

みやこにて、日數おもへは道遠みころもへ  
あける白河の關

堀河院ハ百首歌あせき

同旅

祐子内親王家紀伊

あゆぬよりおもむこそや流みちの名よ  
なけれさるしらはの關

同

源兼氏朝臣

かきりあれはけし白河の關こけてゆきはゆ  
かる、日數をそある

新千載旅

證空上人

光臺に見えはみこりは見さりあを聞てあ見  
ゆるえらかはの關



みちの國へ修行してまうりけるに白河の  
關に留りて所る處にや常よりも月れもし  
ろく哀にて能因う秋風を吹と申けんれり  
いけなりけんどもひ出て名殘おそれ  
は關屋の柱に書付たる撰集詞にはあけま  
れあゑへ修行を待りたるに白河のせきに  
く月のあかりけれと關屋に柱に書付侍  
りしと有

山家集又新拾遺族

西行法師

白河の關屋を月のもる影は人のこゝろをと

むるかりけり

されに入て信夫と申渡りあふぬものこそ  
にたほほてあはれ也都出て日數思むつゝ  
なゝきは霞と共に侍ることの跡たさるま  
て來おける心ひをほも思ひおれれとよみ  
たり

同

都いて、相坂おねおたりまてはこゝろをす  
めおゝと河比關

新拾遺族

丹波忠守朝臣



今宵おそ月よ越ぬれ秋風の音にのみれを志  
ら河乃せれ

羈旅

同

後九條前内大臣

秋かせにれみ志ら河乃關越てれもふも遠志  
ふるさと乃山

同

大藏卿高博

りへるさは年さへ暮ぬ東路や如をめておの  
し志らるその誘き

新後拾遺旅

左大臣

都どは花を見すく、出らりと月にそ越る志  
ら河の關

關旅を

新續古今旅

平 光俊

逢人もまゝ白河に關こえて秋か誘ふくとた  
れにつくまじ

寄關戀

源満元朝臣

へさてゆく人乃心のれくふこそ又しはかは  
の關はありはれ

夫木集



建保三年名所百首歌えたる時  
名所百首下同  
順徳院御製

たよりあはは都へ川はよかりかねもけふそ  
越川もあはらはの關

定家朝臣

白河の關のせき守いとむともとをる、秋の  
色はとまゑし

家隆朝臣

さゝ川は關れもさちのりあにしは月あ吹こ  
く夜半のこかゑ志

名所御障子和歌

定家卿

をるをあまど人を心にぞくゑせく雪にもあ  
りぬしゑかそのせき

さあゝあは磯にて雪にのほるあ

家集

源重之

さゝ河のせせよりうちを乃となくていまは  
あつたのいそゆるゝうな

建仁元年影供歌合關路鶯

夫木集

從三位家隆卿

雪は色はまた白河のせきは戸に明はのこる



凡驚れこゑ

治承二年右大臣百首霞

同

俊成卿

あふさりよけさは來にり春霞夜半みや立  
えあらかはの關

南北百首

同

慈鎮和尚

音羽やまけさの霞とわだ分て心そよよふ志  
あかはのせき

嘉應元年歌合

同

皇太后宮太夫俊成

しら川の關と散敷花よはは苔の莖は字川も  
絶よたり

光臺院入道二品親王家五十首關路花

同

西園寺入道太政大臣

山さきら花の扇と明をえて風も留らぬあ  
河のせは

歌林歌合關路落花

同

前大僧正覺惠

影とたに留えて花は散にりひこせなけ



純白河の關

建仁二年五十首關路花

俊成卿女

同  
すくゝ春月日と花もあらせたり秋のせ吹を

白河のせき

土御門内大臣家歌合

前中納言定家卿

同  
夕川く夜入ぬる影もとまりたり卯花咲る白

河乃關

建保三年名所百首

同

正三位忠定卿

染あへそ木乃葉や落る秋の霜けと白河は  
さの嵐に

最勝四天王院名所御障子に

俊成卿女

同  
そおとあく山路と雪はうはむまで名をたの

み來と白河の關

同

後久我太政大臣

同  
あら河乃關乃秋とは聞えりとは川雪わくる



身死... 卷之十一

山乃邊乃道

名所歌合白河關

同

藤原忠隆

浪のくる末に松山みゆる哉雪ふりとむる  
ら河の關

家集に關路雪白河の關盛興

同

式部卿爲家

ととりある松の木末に雪とちておのり名と  
る白河のせき

同

後京極

あけぬより春の霞も立やせむおよむはさす  
あしらゐと乃關

時節類方角部ひつまさる

藻盤草

兼 輔

とちれくの白河おえてわられにちひつと  
るくゆげととるち

堀河百首

同

中納言師時

ちら川のせきよ秋は留るらむてる月影の  
すみととるかあ

四十九



秋風抄

慈 鎮

月をねもみえそり千島に秋りけてうけく  
こよひ白河の關  
かせさち秋より冬に年越てらふは花見る  
あら河のせき

詠藻

俊 成

色々の木の葉は道もうけもきて名をさへた  
とるあらうはの蔭れ  
雲の浪岩こそ瀧と見ゆるうな名も流れとる  
白河の蔭れ

爲 氏

白河此關の主乃宮はあらさうよにさてあら  
あひあふらん

夫木集

西行法師

れもはすはあらふのれくへ來まらばは越り  
さうりらあらあさ乃關

同

後鳥羽院御製

ゆきふとく袖に夢路も絶ぬへたまあふ河  
の關の嵐よ

建保百首下同

定 衡



みちのれくしらぬ山路を尋てもゆふきりふ  
うららかは乃關

俊成卿女

なにとあくあそまそふゆきゆくりよま  
まは河の關は夕霧

兵衛内侍

あはれさはいほくをはてと白河の關吹こゆ  
る秋の夕か蔭

康光

行末もまゝ霧よりき夜をよめてたき志ら川

此關路越らん

宗久紀行ありゆきさめすまをむありき  
と程にむるは八島なとも過て身にし又侍  
りき春より都を出侍りまふ又此秋の末  
此關を越侍りまかは古曾部は沙彌能因か  
都をは霞ともに出しると秋風をよくし  
ら河は關と詠えけり實とありけりと思む  
あわせられ侍りゆの能因と此歌の爲お猶  
そは境あひらくよめらんを無念かりと  
く東へくさりあるよまにてまはえこもり



るく此國よてよみけると披露志とるか  
や一度はうるは志くくとりとるにや八十  
島の記などいふ物を書置て侍りたれば  
太夫國行り氷のむんかきけんまてこそあ  
まとも此所をはいさゝり心遣さうえて過  
へりりけるをさも侍るさり志こ控心れを  
れ志よ侍りしり  
都にはいまやよをいんあきりせの身お志み  
こゝる白河のせき

和泉式部墓

在石川驛中郷人曰之下泉

按和泉式部父越前守正四位下大江雅輔母  
越中守保衡女上東門院侍女後嫁和泉守道  
貞仍稱和泉式部其女乃小式部内侍共於和  
歌得聞秀之佳名胡奚終于東陸邊地耶其墓  
乃在洛東北院尤可怪  
磐城郡

舊事本紀石城國造 志賀高穴穗朝坂連許呂  
命定賜國造

四十四代元正帝養老二年五月乙未割石城等



六郡置石城國

四十八代稱德帝天平神護二年十一月己未以陸奧國岩城宮城二郡稻穀一萬六千四百餘斛賑給貧民

同神護景雲三年三月辛巳磐城郡人外正六位上文部山際賜姓於保磐城臣大國造道島島足之所請也

五十四代仁明帝承和七年三月戊子陸奧國磐城郡大領外正六位上勳八等磐城臣雄公造跡戎途忘身決勝居職以來勤修大橋廿四所溝池

堰廿六所官舍正倉一百九十字宮城郡權大領外從六位上勳七等物部己波美造私池溉公田八十餘町輸私稻一萬一千束賑公民依此公平並假叙外從五位下

按雄公己波美之為人也克舍己而救人逞自力而奉公義可謂有補益于國家之人也後世為法之則其功績亦不可量焉然沒于篇中而無識之者矣且夫兩郡有司吏民讀之仰其志則庶幾於職分亦足以盡其所守也嗚呼善人哉



同十年十一月己亥陸奧國磐城郡大領備外從五位下勳八等磐城臣雄公書生黑川郡大領外從五位下勳八等靱伴連黑成並授從五位上褒公勤也

夫人之所世雖一旦得之無其實則竟失之而無見其所成就焉若惹虛名者則久而必衰矣雄公向以善蒙稱譽今已四歲未嘗變初志功業不衰焉重賜美名矧又以書生見舉宜哉功烈之傳于今也黑成亦想好人也

同十一年正月辛卯陸奧國磐城郡大領外從五

位下勳八等磐城臣雄公戶口廿四人男十四人女十人磐城臣貞道戶口十人男七人女三人磐城臣弟成戶口四人男三人女一人磐城臣秋正戶口三人男二人女一人賜姓阿倍磐城臣同帝嘉祥元年五月辛未磐城國擬少毅陸奧文部臣繼島賜姓阿倍陸奧臣  
神名帳曰磐城郡七座並小 大國魂神社 二俣神社 温泉神社 佐麻久嶺神社 住吉神社 鹿島神社 子鉞倉神社  
五十六代清和帝貞觀五年十月戊子陸奧國无



位八牡姬小結温泉神授從五位下

菊田郡

一舊事本紀曰道與菊田國造輕島豐明御代坂道許男命兒屋至乃禰定期賜國造

奈古曾關

常陸陸奥邦疆相傳大古素蓋雄尊東征登此山頭經此地而號名古曾關後人山上立宮社祭牛頭天皇以素蓋雄垂跡之地也六月望日行祭禮矣其地也關山下而為關門焉高七丈餘長三十四間濶三間餘南常州多河郡青野村是乃太田

備中守資重領北奥州菊田郡關田村內藤右京亮領地東常州九面邑是乃商舶輻輳之地民屋百餘軒漁家亦相雜相去關山五町餘九面以南山外乃平形海濱去九面三町餘是亦江村五百餘軒備中守封境西乃高山過山中六七町有往昔之關趾今通行之道後人所關而非古昔之地其下曰名古曾坂此地往昔多櫻樹五十年前枯稿盡爾後領主祖父內藤左京亮義泰植百餘株今所存纔三十餘株

寛平の御門御くしおろさせ給むて乃頃御



帳乃めくりには人はさふはせ給ひくち  
りうも先くよ移れさりと此は書々御帳  
にむすひつとる

後撰戀二

小八條御息所

たちよらは陰ふむとかりちると此と誰か名  
こそ此關をすへん

按寛平御門乃宇多帝也在位僅十年倦萬  
機屈政務而退朱雀院昌泰二年己未三十  
歳而落飾以仁和寺益信爲戒師焉是謂寛  
平法皇子曰身體髮膚受之父母不敢毀傷

孝之始也又曰君子無不敬也敬身爲大身  
也者親之枝也敢不敬與不敬其身是傷其  
親傷其親是傷其本傷其本枝從而亡故自  
天子至庶人壹是皆以脩身爲本然今尊爲  
天子富有四海人間之至極何以加之哉帝  
弗思之妄棄天位輕脫袞冕如今以崇高匠  
得之身而忽入浮圖俾身體髮膚至毀傷之  
極尤可痛恨也夫有天地而有男女乃生稟  
之本人倫之始也於是乎天子諸侯已下各  
設之有制度而備其數焉因茲而人道立天



性全今身為浮屠而猶未免在深宮而近于媚態矣故令后妃夫人發啗嗟咏嘆之怨者抑是何義耶是皆不能脩其身所以出淫佛歸法之非心也可不監戒哉

春は東より來るといふこゝろとよ見侍りたり

後拾遺春上 源師賢朝臣

東路と名社の關もあるも乃といひてか春の越て死つらむ

金葉戀下 源俊賴朝臣

名おそてふことをと君かことくさを關の名そをもたもむらりか

陸奥にまかりたる時名社の關に花れ散ければよえり

千載春下 源義家朝臣

ふくむ抄と名こそその關とれもへとも道もせよちる山とをえりか

一日閱源君陸陽侯名社關之詠吟而審其意味蓋亦游優厭飲之氣象也實風檀雅藻之作而固一世之雄也豈魏武橫槊之勇而已乎哉



就想斯時蠻夷滑夏東吳大亂仍以陸侯有承天之器而奉勅祇役帥王師而征實天下大事也夫將帥之於軍旅事之成敗得失兵之利鈍勇億命之死生存亡咸所以繫于主將而是亦天下之重任也且夫客路之勞勞途程之漫漫其間細馬馳驅山野暴露辛苦艱難抑幾何哉何遑及歌曲咏吟之娛耶况又時臨天下之大事身所天下之重任乎然侯在武門而稱海內之英雄且學江師而聞聖賢之遺法智謀兼備勇敢秀衆華夷畏之如神於是視賊也猶弄

嬰兒使兵也猶運指掌故雖過關山險阻之地肚裡悠然而於其愛風光之情亦靄然而生於是乎不得止而乃發吟興且對落花之飄零也遂寫品題而朗吟去聞者愕然驚其勇壯風雅之度量矣自是都下相傳美之人知家藏剝五條三位收之撰集以上達 叡聞天下後世足以識從容不迫之氣象觀大膽勇猛之良器矣烏虜依一首之咏吟而著無窮之識趣焉往昔程夫子說易曰凡師之道威和并到則吉也是不幾所謂威和並到者也非耶又有言曰帥師



總衆非衆所尊信畏服則安持得人心之從又  
曰才謀德業衆所畏服則是也是皆足以備于  
斯侯矣宜哉敗夷虜于坎險之中致大平于穀  
卒之間令聞廣譽徧天下後世可視其實矣  
或曰於侯之和歌也有似通曉其意而實則未  
理會者其說之詳可得而聞也答曰予素非知  
倭歌者如何得句解字釋哉然試推其理而考  
其旨則略似有可領會其大意者矣夫關之爲  
言閉也扃也所以譏其異物察其利害而禁非  
常也故有禦之而剽掠顛越者則必加其禁錮

致其刑戮者也豈忍宛然坐視其暴逆哉是乃  
所以設關之爲名也今山花之值春風而飄零  
落盡者猶行旅之值禦人而剽掠顛越也尤不  
可不加其禁也雖然不能以閉扃專制彼春風  
而微微習習却委其飄零使山花空滿于行路  
上豈非失閉扃之實者哉故痛舉其關也不關  
之實而益質空名之罪也如此可謂能述惜風  
光之情而却罪關之不稱其名者也向尊敬有  
詩曰留春不用關城固花落隨風鳥入雲其大  
意與侯倭歌相似西行吟杜鵑句中有言曰須



專鳴聲乎山田杉下也侯意亦在此專字是以  
天下後世所為絕唱也

新勅撰戀一

小町

見る光る海士のゆきくは湊路に名社に關  
も我以へかくに

西行法師

東路のしれふ乃さとにやすぬひて名こそ  
關とよえ抱わつぬふ

續後撰夏

よみ人のぬす

ほとゝ泥をかこそれせ泥のありせは君か

ねさめはまつ抱泥ぬまこ

實方朝臣陸奥の任は侍なる比五月まで  
とゝきす泥かぬよと申す都にはきゝふり  
ぬらん杜鵑關のこなと此身を抱つぬけれ  
といへりける返事にけりわらなる歌

新後撰戀三

後嵯峨院御製

きく度お名社乃關の名もつら志ゆ泥てはか  
へる身よとぬれぬ

戀の御歌の中に

玉葉戀三

一品資子内親王



夢路は名社の關もなるといふ戀と人  
のかと見ゆ來ぬ

同三

和泉式部

名社とは誰かはいひあはねとも心にすふ  
る關とこそ見れ

同五

安嘉門院四條

さてやさは越よ志ものを今更にきたは名社  
の關守を字に

前右近大將頼朝朝臣都に上りて侍けるか  
あ川まへをたりなむと申けるころ川かわ

あはる

續千載族

前大僧正慈鎮

東路の關は名社の關の名は君をみやこあす  
めとかりたり

返と

同

前右兵衛大將頼朝

都あは君にあふさかちゆげは名社に關を  
遠きとをいれ

新千載戀三

右大將道綱母

あえ託る相坂よりも音にれを名社はあまき



關をいふらん

新拾遺戀二

贈從三位爲子

きをもういされを名社に關の名を行相坂を  
いそをこゝろに

前大納言隆房

いりよ又あゝろむと川乃通ひ路も末は名社  
の關とあるらん

新續古今戀一

前大納言爲氏

いとほるゝ我身名社の關の名とつれあき中  
やそあ先成らん

歌枕

俊頼朝臣

東路の名社のせき乃よふこ鳥あふゝはをへ  
き我身なるらん

堀河百首下同

權僧正永縁

相坂を越あまものを今はとゝなこそこの關に  
名こそ川らとれ

大納言師頼

立別を廿日あまりに成にけりけふや名社の  
關とこゆらん

顯仲



遙々を尋來にりありあけま路に是や名社のせ  
きととみまき

河内

戀託てきれふもけふも越へたに名社の關を  
誰りすへけん

建仁元年歌合

夫木集

家長朝臣

東路はあこぢの關をたかくかたに人くといと  
みうくひすのこゑ

久安百首

同

待賢門院

行やせむゆかすやあらま志東路はあこその  
せれによよみあ鳥哉

同

讀人しふに

東路の名こそその關に生かうらあほ人ま杯を  
はなすゝきうな

同

忠盛朝臣

春風を名社に關乃運さまらげふいく日にり  
たつねれつゑん

間時鳥といふあどを



同

前右兵衛督爲教卿

あけやいま遠方にくる時鳥名にはあそれ  
關といふとも

寶治二年百首

同

後九條内大臣

夢路あもかこ控れ關やはくゑん我身にか  
よふ面影そなき

同

基俊

名に忘れはゝ名あそといふと我妹よ我れ  
こさはゆるせ關守

同

兼昌

都人戀をけまてお音せぬはあお控の關にさ  
はるにやあらん

拾玉

慈鎮

あそ乃をや春ま川島のうち四すみ忘はと名  
あそ乃關路あそある

千五百番歌合

顯昭

かへる春思ひやるこそくるとれなあそ乃  
關此夕暮のそら

小侍從



りくはあり名こそ世のせれとおもひたる人に  
心をなにととゝめん

新葉集

文貞公

こそとらふ名社の關を相坂の山乃あなとよ  
誰かすへけむ

人の統うに

中務

ま川人のととく  
名こそ託たれ名社の關  
に今はさそふし

なこそそのせき

名こそ世の名こそ世の關に來にけ統と死く死

を猶もこゆへき哉

名古曾關

信明

名お世に名社に關は行りふと人もどか先  
は名の系也なり

奈古曾山 見名寄歌枕

是乃關山也前所謂名社坂之山也

亭子院御時歌合名社乃關陸奥

貫之

れえめどもをまりもあへす行春を名社の山  
の關もとゝめす



九面濱

關山東濱多文貝細石設盆池尤可愛

西行法師

九面や浪打よせて道もあこころをあこその  
せきといみらん

岩崎郡 按乃岩城也下檜葉亦標葉之誤也

此郡名及檜葉郡亦不見古來郡名

四倉濱

在田網村近于女濱有善遊堂土人曰之波立藥  
師其堂飛彈内匠所斧斤也

西行法師

あちれくの野崎の字らに旅ねあてととと夢  
あん波立れ寺

久濱

近于檜葉郡古曰之好見濱

和泉式部

駒な川む岩城の山とあえ過て介もこのみの  
濱にかもねん

佐波古御湯

相馬領日之湯本驛西南有大嶽曰三箱山古之



佐波古山是也三箱文字土人誤佐波古者也其山下有温泉是乃佐波古御湯也喜式温泉神社是也

物名

拾遺

よみ人こふは

ありすあてこゆるゝ人のそむさをはさはこのみゆる山れあなたり

藻鹽草五

同

よとゝもあなたりあ君とあちれく乃さはこのみゆといはせてあか

女濱

住吉館 一名小名濱有鹿島神社神名帳鹿島神社是也

岩城判官居城是也建住吉神祠是亦喜式所記住吉神社也

標葉郡

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳標葉郡人正六位上文部賀例努等十人賜姓阿部陸奥臣是亦島足之請也

五十四代仁明帝嘉祥元年五月辛未標葉郡擬少領陸奥標葉臣高生賜姓阿部陸奥臣



神名帳曰標葉郡一座小 苔野神社

標葉境

堀河百首

顯中

東路の志絲はさかひにやせり志て雲井よみ  
ゆる川くは山をか



